えどがわの女性
vol.44
2022年
6月

「『源氏物語』の世界を表現」
－創作和紙人形作家－

近藤　洋子
1941年（昭和16年）
江戸川区松江生まれ
松江在住

「春日野源氏」に魅せられた12歳

昭和27年（1952年）の春、帝国劇場に連れて行かれて観ましたのが、宝塚歌劇の「源氏物語」だったんですね。光源氏に扮した春日野八千代さんのあまりの美しさに目を見張り、それ以降、12歳の少女は春日野さんの猛烈なファンとなっていきました。この舞台は春日野さんの当たり役となって、役者の花柳章太郎には「春日野源氏」と、日本画家の伊東深水には「もっとも源氏らしい源氏」と言わせたほどでした。

わたしの父は文化的なことに明るい人でした。幼い時に都心でディズニー映画の「バンビ」や「白雪姫」を観て、帰りにクリームパフェを食べたのも覚えています。グルメでもあった父があちこち食べ歩き、昭和34年（1959年）にここで割烹「寿賀多」を開業したんです。まったく素人の母が女将をやって大変だったと思いますよ。母は浦安の呉服屋の娘で、手芸やこまごましたきれいな物が好きな人でした。この年、高校を卒業したわたしは帳場を担当し、観劇、手芸、好きな動物を飼うこと、それだけで満足でした。春日野さんの舞台に夢中になって、同じ舞台を3，4回観ていましたね。歌舞伎やミュージカルなども観ました。

すごく恵まれたんですけどね、従業員のなかに大阪出身で宝塚の淀かほるさんとお知り合いの方がいて、その方の伝手で春日野さんに、20歳ころにお会いできたんです。すごく緊張していたわたしに「楽屋にいらっしゃい」と気さくに言ってくださり、それ以降、メイキャップして衣装を着けられるところを数えきれないほど見させていただいて、仕上がると一緒にエレベーターに乗って彼女は舞台に、わたしは客席に。楽屋では、春日野ファンで作家の田辺聖子さんや平岩弓枝さんとお会いできたのもよい経験です。ヨッちゃん（春日野さんの愛称）の楽屋に食事を届けたいって言うと、父が食材を仕入れに行き、板前が調理して、わたしは車を拾ってね。お店にも招待したんですよ。

今思う両親のありがたみ

父もわたしも弟2人も娘たちも、みんな松江小学校卒業です。子どものころ、この辺は農家が多く、わき道に入ると一面の畑で池があり、溝川の水は透き通っていて水草が生え、メダカやザリガニがたくさん。トンボが群れをなし、蛍も飛んでいたんですよ。

高校生のころには、近くの原っぱに浅香光代さん、不二洋子さんや大江美智子さんらの女剣劇の小屋が立ってね。観客がおひねりの代わりに野菜を舞台に差し上げたり、わたしの飼っていた猫が化粧をして登場したりと長閑でした。映画館もたくさんあって、松江商店街には千葉県の浦安や行徳からも買い物に来ていました。大晦日はもう夜中の1時過ぎまで店が開いていましたね。

割烹「寿賀多」は、数年後には現在のみずほ銀行小松川支店を入ったところに、滝や鯉が泳ぐ池のある料亭を新築して引っ越しました。そこも昭和45年（1970年）に首都高速七号線の建設で立退きになり、江戸川区役所前に移転しました。

当時の松江には工場も多く、忘年会や新年会っていうと100人くらいの宴会になるんですよ。今のようにカラオケなんかありませんでしょう。だから、「流し」を呼んだり、仲居さんのお三味線で歌ったり、賑やかでしたね。腕のよい花板、その下に板前、洗い方がいて、仲居さんは住込みの方が多かったんですよ。今は高級食材になってしまった松茸や車海老、海鼠腸、鮑など、ふつうに料理に出していましたの。

最初のお店だったここが空き家状態でしたでしょう。父が「洋子に喫茶店が向いてんじゃないか」と言って、一緒に都心のお店を見て歩き、わたし好みの雰囲気の店に改装してオープン。そのころ出たてのクーラーを取り付けたので、涼しいからと店は繁盛し、若い女性を3人ほど雇いましたが大忙しでした。それから2、3年後に母に薦められ、お見合いし、結婚しました。主人はサラリーマンを辞めて、喫茶店経営を一緒に担ってくれて、病気で亡くなるまで二人で続けました。優しい人でした。

◆桐壺帝・輝く日の宮と光る君　© 近藤　洋子

江戸川区聞き書き研究会

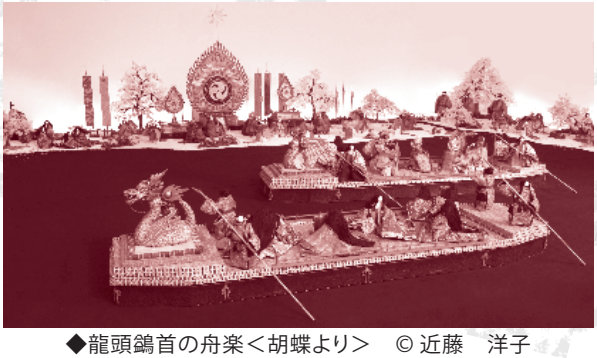
聞き書き研究会は、江戸川区を愛し、江戸川区で強く逞しく生きた女性の姿を聞き書きとして残すため、江戸川区女性センターの区民ボランティアが2010年に始めた活動です。女性センターは2020年に人権・男女共同参画推進センターに統合され、この活動を所管しています。

創作和紙人形作家

春日野さんの宝塚のお宅に伺った時、春日野さんの舞台姿を再現したお人形が3体飾られているのを拝見したんです。わたしも「春日野源氏」の世界を人形にしてみたいと漠然と思いましたね。その思いをもち続けて舞台を追いかけていたんです。

下の娘が小学校高学年になった40歳過ぎに、人形教室に通いましたが1年ほどで辞め、わたし独自の独創的なお人形作りを始めました。その後、自宅でお教室を開き7,8年教えていましてね、昭和58年（1983年）の総合文化センター落成時とその後2回ほど生徒さんと作品展をしました。

わたしの代表作品の一つは「六条院の春」です。間口20m、奥行き2.7m、人形170余体、制作期間3年余りを費やして完成させた独自のジオラマの作品です。大きなお人形は35cmくらいで、お顔は真っ白なんです。『源氏物語』って想像力を掻き立てられる世界であって、みなさんそれぞれにお顔を思い浮かべると思いますのでね。



◆龍頭鷁首の舟楽＜胡蝶より＞　© 近藤　洋子
貴族の船遊び用の船で、船首に竜の飾りをつけた船と、鷁という水鳥の飾りをつけた一対の船。

ありとあらゆる物、大道具、小道具、小物類まですべて自分で作ります。何を作るにも行き詰まったことがありません。大きな舟は1.8mもあるんですよ。龍頭鷁首の舳先を作るにも難なく閃くんですよね。そこがやっぱり、春日野さんに原点があると思うんですよ。舞台は立体的なものでしょう。もちろん『源氏物語』や『源氏物語絵巻』をはじめ、さまざまな資料も読み、勉強もしましたよ。でも、本を読んだだけでその世界を表現しようとしても無理だと思うんです。子どもの時から自分の目で、春日野さんの舞台や楽屋で見てきたすべてが財産になっていると思うんです。

創作過程で何が一番大変かというと、自分のイメージに合った和紙を探すこと。紙を選んで職人さんに絞っていただくと細かい皺がたくさん寄せられて縮緬のような感触になるんです。しなやかさや強靭さが出るんです。その和紙で衣装を、例えば十二単のように下重ね、袿、唐衣、裳などを重ねていきますでしょう。合わせる和紙に違和感を感じたら、その1枚の紙に拘って探しに行きます。思いどおりの和紙が入った時はほんとうに嬉しいです。

下拵えの作業中は好きな越路吹雪さんのCDを聞いたりして楽しくて作りますが、どっぷり浸って作るには夜中、それこそ草木も眠る丑三つ時なんです。わたしは六条御息所が好きなんですよ。教養があって美しい人で、奥ゆかしいけれど、執念深く生霊となって葵を死に追いやり、死霊となっては紫の上、女三の宮を苦しめるような女性なんです。でも、一途なところが似ているのかしら、すごく惹かれるんですよ。その世界のジオラマを制作していた深夜、風邪も引いてないのにゾォーと寒気がして、何だろうと思ったら、できあがった人形たちの視線が一斉にわたしを見ていたんですよ。気持ち悪くなるほどのめり込んでいくんですね。

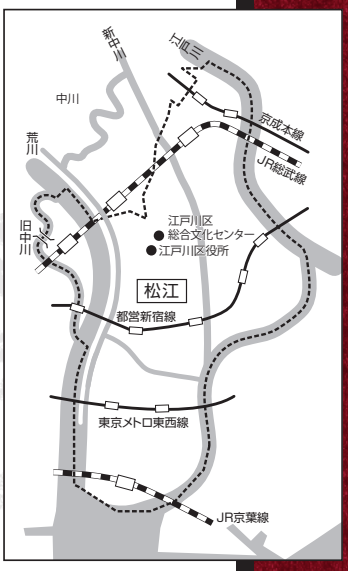
『源氏物語』研究の第一人者と言われている秋山虔先生から、「物語をよく読み込んで実にすばらしい表現をしている、まさに目で見る資料になる」、春日野さんには、「あなたの人形は色使いがきれい、動きがあるわね」と言っていただきました。この二つの評価をいただいたことは、わたしの宝でもあり、誇りでもあるんです。また、1994年に江戸川区文化功績賞をいただきました。

プロになったわたしの人形展は、百貨店などの200坪くらいの部屋で展開するんですよ。前日はエージェントやスタッフ5人くらいと朝8時ころから夜中の1時過ぎまで、もう食事もそこそこに地獄のような作業が始まるんですよ。いつも主人がストレス解消役として同行してくれました。

江戸川区で展覧会を

石州半紙・細川紙とともにユネスコ無形文化遺産に登録された本美濃紙が、東京オリンピックの表彰状に決まった時、その和紙職人さんからお電話をいただきました。「たとえ小さな表彰状でもね、世界の国々の人たちにもち帰ってもらえるって、こんなに誇りになることはありません」ってね。その時、わたしも何かできることはないかと考えました。カヌー会場が江戸川区でしたので、外国の人たちに「おもてなし」として、ささやかですが日本文化を垣間見ていただけるようなお箸セットを作ろうと思ったんです。箸袋を和紙で、羽子板、晴れ着、鶴などをデザインして4か月くらいで2,100組ほど作りました。ところがコロナ禍のために無観客開催になり、いっさい接触ができなくてお渡しできなかったんです。その後、このお箸セットはコロナ対応に頑張っていらっしゃる保健所や児童相談所の職員のみなさんと障がい者サークルにお届けでき、喜ばれました。

わたしの展覧会は、2008年の「源氏物語千年紀」に全国で開催しましたのが最後です。人形は現在も自宅に400体くらいあります。実物を見ていただきたい。将来を担う子どもたちにぜひ見てもらいたいと思うんです。この歳になってもまだまだたくさんの夢があるんですが、「最後に一つだけ叶えてあげる」って言われたら、生まれ育ったこの江戸川区で「近藤洋子創作和紙人形―源氏物語の世界」展を開催したい。日本文化の原点『源氏物語』の世界を和紙人形で作り上げた優雅で壮大なジオラマを、この下町の江戸川区から発信することはすごく面白いと思うんですよ。



◆ インタビュー／2021年12月
2022年1月
2022年3月
◆ 聞き手／小野塚和江、村田正子
◆ コーディネーター／樋口政則

◆お問い合わせ◆
総務部総務課
人権啓発係
☎6638−8089